



『赤と青のガウン オックスフォード留学記』

彬子女王 著

PHP 研究所 刊

定価 1,320円 (本体1,200円+税)

9年前、三笠宮家の彬子女王殿下による英国・オックスフォード大学留学記が出版された。昨年、一人の読者がその留学記をX(旧ツイッター)で「面白すぎる」と紹介した。その投稿がバズった(爆発的に注目された)ことで今年4月に留学記は文庫本化され、発売から2か月弱で発行部数が驚異の10万部に到達した。

著者は英国での5年に及ぶ日本美術研究で成果を挙げ、オックスフォード大学博士課程修了者の証である赤と青のガウンを着る。本書には、そこに至る旅路が鮮明かつ愉快地に描かれている。

著者の論文執筆と峻厳な教授の教えに刻苦する姿は研究者の真髓を表していて、ひたむきさに胸が打たれる。一方、英国での珍事件の数々には思わず吹き出してしまう。一般市民とは違う外交パスポートを不審に思われて空港入国審査で足止めされる話や、著者が皇族であることに気

づかない日本人留学生とそのまま会話を続ける話などはシェイクスピアの喜劇さながらだ。

今回のブームで本書に夢中になった人は熱心な皇室ウォッチャーに限らない。インターネットで本書を検索すると、皇族の著作を初めて手にしたという大勢の人が、本書の感想を発信しているのがわかる。著者の奢らない人柄や思いやりとウィット、皇族としての矜持と品位を絶賛し、仲間たちとの青春に憧れ、英国や日本美術への興味を深めている。

誕生から9年目に舞い戻ったプリンセスとオックスフォードの愉快的連中は、大勢の読者から、かくも熱狂的な拍手で出迎えられたわけだ。

では、なぜ今、本書がこんなにも人気なのか。それは、コミュニティを失ったまま、SNSでは議論にもならない屁理屈で互いに冷水を浴びせ合うような、無機質で冷淡なバーチャル社会に生きる私たちに、彬子女王殿下が贈ってくださった“こうあるべき世界”の物語、質感のある町と人の物語であるからだと思う。

(日本農業新聞 齋藤 花)